

佐賀県立博物館報 №.60

佐賀市城内 | 丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



木造 仏頭 藤原時代 (東松浦郡浜玉町山田 常福寺)

高さ(現状)二七・五cm 面長一六・一cm 面幅一七・二cm

寺伝では薬師如来と称され、境内の薬師堂に安置されている仏頭である。切ぎ目から後頭部を失い、更に両耳染を欠き、頭部・鼻頭は朽損している。こうした損傷にもかかわらず、その相貌はいかにも藤原期の如来像らしく静かな趣があり円満な相好をしめしている。頭部に小粒の螺髪を切付け、丸味の顔に彫り口の浅い眉、見聞きの少ない切れ長の目、整った鼻、小振りで引き締まった口唇、これらは端正で、表情は瞑想にふける姿を思わせる。

なお、ここにはこの仏頭と共に体部も保存されているが朽損が激しい。他に制作の時期が異なると思われる菩薩・神将像も伝存している。

目次

- 木造 仏頭…………… 1
- 資料紹介・木造阿弥陀如来坐像…………… 2
- 資料紹介・「精煉方研究調査原本訳書」について…………… 3～6
- 博物館学習の記録…………… 7
- 博物館日誌・当館で頒布している図録紹介…………… 8

資料紹介

「精煉方研究調査原本訳書」について

江戸時代、「精煉」という言葉は化学を意味することで、佐賀藩では、嘉永5年(1852)11月、国産方に「精煉方」を設けた。

幕府では、万延元年(1860) 蕃書調所内に「精煉方」を設けている。また、諸藩にもこれに類するものが、前後して置かれている。

佐賀藩の「精煉方」の設置は、「鍋島直正公伝」によると、10代藩主直正が、蘭学より物理、舎密、築城、冶金などの科学知識を得るために、国産方に精煉方を置き、城北の多布施河畔にその工芸(理化学)試験所として、該当学者を集め研究させた。とある。

しかし、ここでの化学実験は、不成績に終わることが多かったため、経費節減の上からその廃止を問われてきたが、直正はいつも「是は吾人の道楽なれば制限する勿れ」と言って存続させてきたという。

精煉方の主要メンバーは、主任の佐野常民、御雇の中村奇輔、石黒寛次、田中近江、儀右衛門父子などであった。

研究内容は、基礎化学から応用化学へと移り、あとでは火術、銃砲、蒸気機関、電信機に及んでいる。

安政2年(1855)には、蒸気船、蒸気車駆動製作、同3年、ドンドル管(雷管)製造、同4年、電信機を島津斉彬に贈る。同6年、火薬製造開始、文久2年(1862)、幕府依頼の蒸気罐製作、同3年、蒸気船「凌風丸」建造(慶応元年竣工)、アームストロング式野砲製造など、当時我が国の科学技術の最先端をいっていた。

しかし、これまで具体的なテキスト内容が明らかでなかったが、昭和56年、当館に預った鍋島報効会所蔵の「精煉方研究調査原本訳書」5包37冊本からその概要の一部が明確になった。

5包本を各々A～Eの記号を付してみると、(名称は各訳本に貼付されたものによる)

A、「精煉方研究調査原本訳書(リュスト氏原著)

石黒寛次日記録

各冊、縦26.7×横17.3 和綴本 12冊

表紙は鼠色緞模様の

但し、11のみ縦24.0×横16.5 和綴本

表紙は黄色緞模様の

B、「精煉方研究調査原本訳書(リュスト氏原著)

石黒寛次日記録

各冊、縦24.0×横16.3 和綴本 9冊

表紙は黄色緞模様の

C、「精煉方研究調査原本訳書

石黒寛次日記録

各冊、縦18.9×横13.4 和綴本 2冊

表紙は褐色

D、「精煉方研究調査原本訳書(ワフネル氏著) 石黒寛次日記録

各冊、縦24.0×横16.4 和綴本 8冊

表紙は黄色緞模様の

但し、№7は鼠色緞模様の

E、「精煉方研究調査原本訳書(軍制及び兵器之部) 石黒寛次日記録

各冊、縦27.0×横18.5 和綴本 6冊

表紙は鼠色格子模様の

これらは、いずれも佐賀藩精煉方の石黒寛次(直寛)訳の墨書きで、このうちA、B、Cは1847年に刊行された、ドイツ、リュスト氏の「百工提要」の訳本である。今回はこの「百工提要」の訳本の体裁について紹介する。この訳本は現存する和綴の冊数からみれば11編全12巻からなっている。A、B、C包はいずれも全巻揃いでなく、各々欠本と端本になっている。

あらかじめ、その目録にある項目をあげてみる。

一編上	百工提要目次	テコロロ	金属冷質操作
	ギー		ブリッキ製造
	凡例		線鉄製造
	○第一編		グラードトレッケン
	金属総論		鋳造瓦ル華尼
	鐵 エイスル		ガルハノプラスチック
	銅 スタール		金属器外面裝飾
	粗銅 リュースタール		覆着法 フラツテン
	艾、スメルスタール		鍍金 フルボウルデン
	埃銅 プランドスタール		鍍銀 フルルヘレン
	艾、セメントスタール		鍍銀 フルチン子
	鍍銅 キートスタール		珠寶 スレイベン
	埃銅法		及びボレイステン
	銅 コーブル		塗漆 フルニスセン
	鉛 ロード		及びフルラツケン
錫 ナジ		別種金属工作	
亜鉛 シンキ		帽子針 スベルデン	
安寶改尼		縫針 ナールド	
蓋鉛 ビスミユット		兵器工作	
鋳拔尔多		大銃 ゴフザンキユット	
尼結尾		ト	
砒 アルセニツキ		小銃 ハンドヒュール	
満焼		ワーベン	
蘇密島母		鋳切 ホウワーベン	
鳥卵母		及びステッキワーベン	
瀝 クキツキ		鍍金 シュントキュンスト	
銀 シルフル		ト	
金 ゴウド		金属染料	
白金 プラチナ		山青 ベルダブラウ	
金属煖格操作		洋銃 ベルレンスブラウ	
金属混合料		ウ	
金属鋳造法		固拔尔多青及固拔尔多綠	
鍛煉 スメーゲン		銅青 コーブルブラウ	
格着 ウエルレン		銅緑 コーブルグリーン	
化銅 フルスターレン		鉄赤 エイスルロード	
汗着 ソルデーレン		鉄褐 エイスルブロン	
鉄鋼化劑	ハルゲン	鉄黒 エイスルワルト	

一編下

蘇魯麻莖黃	蘇魯麻莖赤	尋常硝子	木材各論	蠟燭	カールス	銅版	プラートスイデン
蘇魯麻莖綠		色硝子	木材鑿摺	截斷	貯蓄		ン
鉛黃	ロードゲール	硝子外面操作	焚焼材	ブランドストア		銅版	スタールガラーベン
鉛白	ロードウィット	○第四編	炭化法	フルコーリン	○第八編		
朱	フルミルリウーン	石灰粘土土用法			紡績品類	凡例	石版
又、シナナベル		凡例	多尔	番	ベッキ	毛	ウアル
紫金	ゴウドビュルベル	石灰	カルキ	石灰燻化	カルキブランデン	毛綿	カツーン
○第二編						麻	フラス
塩灰類		義布斯		○第六編		絹	セイデ
凡例		燒堊石灰		脂肪類用法		糸布類晒洗	ブルーケン
食塩	ケウケンソウト	燻石燻鍋	ステーン	バツ		糸布類染色	フルエン
芒酒	ガラウベルソウト	クレキ	ハン	子	ン	ヒルト	帽子
消石	サルベートル	レキ		布	ル	ニス	并
硝砂	サルアムモニアク	煖遊	ポツ	ン	マ	製紙法	バビール
硝砂	ボラキス	ホツ	ゲ	ード		凡例	
明礬	アロイン	煙管	タバ	ス	ベイ	紙	ロム
緑凡	胆凡	陶器	アル	デ	ウ	ル	モノ
硝凡	硝凡	ハイ	アン	セ		同	諸品
純萬亞斯		磁器	ボル	セ	レ	同	諸品
普達		炸藥	ス	メル	クル	別紙	
硝石	ウエインステーン	ス				色紙	
火薬	ビュスコロイド	○第五編				加尔多	
硫酸	硝酸	木材用法				書籍版	ブ
○第三編		凡例				ク	エ
硝子	ガラス	木材総論				木版	ホ
凡例						ント	

である。各包本の記載の体裁は、次の通りである。

A

冊数 番号	第1紙左端書	上 部 朱 書	第2紙書き出し及び巻末項目	使用紙	備 考
1	百工提要 目録 (朱)	一	百工提要目次テクノロギー同セットメール法	精青	朱筆入り (第2紙右上に「精煉」の印)
2	〃 第1上		(目録)百工提要第1編凡例～第62章白金	和、精黒、精朱	
3	〃 第1下	三	金属煉烙操作第63章～第144章紫金	和、精青、精朱	逆綴り、朱筆入り (第2紙右上に「精煉」の印)
4	〃 二編 (朱)		第二編塩灰類製用凡例～第59章塩酸	精朱、精青	
5	〃 第三		尋常玻璃第1章～第24章ダイヤモンド	「文杏園蔵」黒 精朱	上欄に項目
6	〃 第四		土類凡例～第24章掛鍋	精青	
7	〃 五篇 (朱)		百工提要木材篇凡例～第54章松桐製法	精朱、精青	逆綴
8	〃 六篇 (朱)		脂肪類凡例～第20章可燃瓦斯	精青、和	
9	〃 七篇 (朱)		動物体諸品凡例～第40章絹布	精青、和、精黒	
10	〃 第十編 第十一編 終り	十二	第十編泡酸蒸餾凡例～(第十一編製糖凡例) ～澱粉製糖第9章	精所青	
11			百工提要木材篇凡例～第39章百工所用	工部省黒	黄色表紙、小版、浄書
12	百工提要第一編上	二	百工提要等1編金属総論メターレン第1章 ～第62章白金	精青	朱筆校正、仮名づけ

備 考

- 5の第2紙頭書に「千八百四十七年鑿行百工提要第三編 独乙都律私撰著 石貫實二譯稿」とある
- 11の第1紙頭書に「千八百四十七年鑿行百工提要第三編 独乙都律私撰著 石貫實二譯稿」とある
- 12の第2紙頭書下部に別筆で「独逸律私撰原著 日本肥前佐賀石黒直寛重譯 柴田洪平校閲」とある
- 使用紙の略号は 和=紫線のない和紙 精黒=「精煉方」入り黒11行罫紙 精朱=「精煉方」入り朱11行罫紙 精青=「精煉方」入り青11行罫紙 「文杏園蔵」黒=「文杏園蔵」入り黒11行罫紙 精所青=「精煉所」入り青10行罫紙 工部省黒=「工部省」入り黒8行罫紙

B

冊数 番号	第1紙表書	上部 朱書	第2紙書出し及び巻末項目	使用紙	備 考
No.1	百工提要第一巻下		金属機操作第63章～第144章紫金	青12行罫紙	浄書、朱筆校正、仮名づけ
No.2	〃 二	四	百工提要第二編塩灰類製用凡例～第57章塩酸	「工部省」原稿用紙 20×10	〃 〃
No.3	〃 三	五	「千八百四十七年録行 百工提要 第三篇 独 乙律私薦著 石黒寛二譯」第1章玻黎～第24 章鑽石	〃	〃 〃 (石黒寛二譯の部分は上 から和紙で覆っている)
No.4	〃 四	六	百工提要第四編 独乙律私薦著 土類凡例～坩鍋第24章	〃	浄書、朱筆校正、仮名づけ
No.5	〃 五	七	百工提要第五篇 独乙律私薦著 土材凡例～第54章參爾蒸錮	〃	〃 〃
No.6	〃 六	八	百工提要第六編 脂油類凡例～第20章可燃瓦斯	〃	〃 〃
No.7	〃 七	九	百工提要第七編 動物体諸品凡例～第40章錫布	〃	〃 〃
No.8	〃 八		百工提要第八編 紡績品類凡例～第64章毛布製法	〃	〃 〃
No.9	〃 九	十二	百工提要第九編 洋紙製法考總括～第62章石版	〃	〃 〃
備 考 ○No.2～No.9の第1紙右側に「石黒直寛譯稿」の墨書がある					

C

冊数 番号	第1紙表書	上部 朱書	第2紙の部分	使用紙	備 考
1	高取文庫 百工提要第八編 全		百工提要第八編席目毛布ウラル 自第1章至第13章 〃 〃 壓色法 自第57章至第64章	無地和紙	浄書
2	高取文庫 百工提要第十編 第十一編 全		百工提要第十編席目麦酒醸造 ^{ドールブロー} 自第1章 〃 ^{ツエレ井} 至第8章 第十一篇澱粉製糖セットメール第9章	〃	〃 第1紙右下に別筆で 「石黒草稿」とある

記載の体裁からみると、A包12冊は、第10巻(第8編)、第11巻(第9編)の各1冊ずつが欠本しており、それに別の端本の11(五篇の部分)、12(第一上編)の2冊が加わっている。

また、B包9冊は、第1巻(目録)、第2巻(第1上編)、第3巻(第1下編)及び第12巻(第10編、第11編)の4巻が欠本しており、別の端本第2巻(第1巻下)が加わっている。

C包2冊は、「高取文庫」の呼称本で、第10巻と第12巻の2冊だけで、他は欠本である。

このことからみて、Aの1～10(5は別)は、石黒寛次の翻訳草稿とみるべきであろう。5、11、12は別人による写本の各々端本、BのNo.1は端本、No.2～No.9は別の写本、Cは高取文庫本である。

従って、この「百工提要」は、①Aの1～10(5を除く)、②5、③11、④12、⑤BのNo.1、⑥No.2～No.9、⑦Cの7種類があったことになる。

明治以降のある時点で、残存していたこれらに表紙を

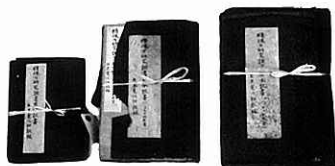
つけ、題簽を貼付して製本したものであろう。この中には、逆綴の2冊があって、内容には拘りなく製本されている向きがある。

なお、Aの11、BのNo.2～No.9の「工部省」原稿用紙使用分については、明治3年、工部省の設置以降による浄書本ということになる。

訳者、石黒寛次は但馬出身の医者で、京都で蘭学を学び、嘉永4年(1851)春、周防の浅田某方に寄寓していた折、佐野常民からの依頼で、中村奇輔とともに佐賀に来て、精煉方に雇われた。明治維新時は、精煉方より工部省へ転任し、引き続き翻訳に努めたといわれるが、その後の消息は不明である。

秀島成忠著「佐賀藩統治沿革史」P374～P379には、佐賀藩精煉方が研究を遂げたものとして、6ページにわたってその項目をあげているが、実はこれらの項目は、これまであげてきた「百工提要」の目録に掲げてある項目であることを、付記しておく。

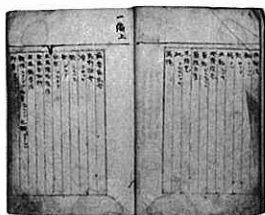
(資料係長 尾形善郎)



C

B

A



A 1 目録(部分)



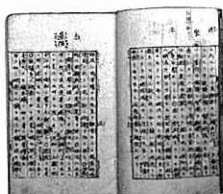
A 2 第1編金屬總論第13章(部分)



A 3 (逆綴)



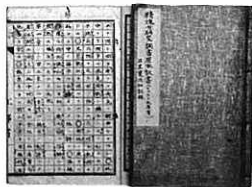
A 9 第7編第12章(部分)



A12 第1編第8章(部分)



BNo 1 金屬鑲格操作第81章(部分)



BNo 2 第2編第3章(部分)



BNo 2 中表紙



C 1 中表紙

資料紹介

木造阿弥陀如来坐像 南北朝時代

杵島郡白石町大戸 妙楽寺 像高66.2cm

この阿弥陀如来像は右手を屈臂し、掌を前に向けて差し伸べて第1指と第2指を捻じ、左手は膝上に置いて右手同様の指を捻じた上品下生印（来迎印）を結ぶ。衣は偏袒右肩に着け、右足を外側にした結跏趺坐をして坐している。

螺髪は大粒で、髪際で13粒を数え、各螺髪上面には螺旋にあらわしている。地髪部・肉髻部ともに低く、その境の肉髻朱は大きく彫り出している。後頭部には10条の縦の刻み目だけをつけて、螺髪を省略している。

面貌は目尻がやや上がった切れ長の彫眼、やや低目の鼻、引き締まった山形をした口唇、長い耳をまともによく彫っている。首には三道を刻む。

衣褶線はにぎやかであるが、左肩から腹前へ流れこむようにうまく彫り出されている。背面の衣文は一切省略しており、それだけでなく粗いのみ跡までも残すなど仕上げも雑で、像の前面性だけを考慮に入れた彫りとなっている。

本像はクス材を用いた1木造りで漆箔が施されている。構造は頭・体部・膝前までの像の殆どを1木で彫り出しており、袖に挿し込みにした左手。右肘先、それに膝前の裳先だけを削ぎ付けている。

引き締まった口元、広い肩幅、流れるような衣文などに鎌倉様がかがえるが、太い螺髪、低い地髪部、浅い面奥、省略された背部に時代の下降がかがわれる。

蓮台は前面にのみ蓮弁を4段に彫り出したもので、最下段に8葉、その上に6葉ずつ3段、各々蓮弁の間に配している。クス材で前後2材を刳いており、肉を厚く残して中心部を椀状に内刳りしている。

材質、蓮弁の形状、後部を省略する彫技などから見て阿弥陀如来像と一具として制作されたものであろう。

像高	66.2	面長	13.7		
面幅	14.0	面奥	16.1		
肩幅	34.0	胸厚	16.0	台座直径	57.0
腹厚	20.3	肘張	42.0	高さ	24.2
膝張	53.8	膝奥	43.5		

(企画普及係長 志佐惲彦)



博物館学習の記録

佐大附属中学校一年生、4学級88名が、昭和57年6月4日、8日の両日、ゆとりの時間で学習として博物館で学習しました。生徒の皆さんは「土器」・「石器」を実際手で触れ、当館学芸員の説明を聞き、縄文・弥生・古墳時代の人々のくらしに思いをさせました。その学習体験を「郷土の先人の遺物を手にして」という感想文にして寄せてもらいましたので、そのいくつかを文中抜萃して紹介いたします。

“手に取ってさわる”ということてたいへん期待をして行った。そしてじかに手に取ってさわって見て思った。この石一つ作るのに何時間かかったのだろうか。この石を磨くのにどれくらいかかったのだろうか。こうして見ると先人の苦労が少しでも分かったような気がする。「百聞は一見にしかず」ということわざがあるがまさにその通りで先生の説明を聞いたり、写真を見たりすれば多少イメージが分かるもの本当に分かったわけではない。しかし、本物を手に取って見るとやはり本物の良さだろうか。何かがちがったようです。そして感じた。僕達も明日のために何かを残せる日々を過ごしたいなあ。先人が残したものはまた別の良さを持った物をたくさん生み出して歴史の上に刻みこんでいきたい。

(一ノ瀬浩司)

私は初めて本物の石器や土器を自分の手でさわりました。あの黒曜石の切れそうな刃・縄目のついた土器、手にもった時はかすかなぬもりを感じました。

石包丁というものは資料などでいくらか見たことがあったけれど実際見てみると考えていたより大きかったのでびっくりしました。なぜ石包丁を使用していたかという理由の一つに「昔は米の品種が一定していなかったのでうれたものから取ってつける」ということを説明していただいた時、「あなるほど」と感心してしまいました。

(中島郁子)



博物館学習風景（ロビー）

“信じられない”これが郷土の先人の遺物を手にした時、第一に感じたことです。本当に自分の手の中にある土器が二千年以上も昔のものかと思議に思ったくらいです。この土器で昔の人たちは食べ物の器にしてみたり、生産活動の道具にしてみたりし、またそれを利用するのに都合のよくなるようないろいろな工夫がされてきました。ひとめ見ただけでは何なのか全くわかりませんが、博物館の先生の説明でなるほどなと思うこともたくさんありました。

(碓 美香)

私は小学校4年の時、博物館にきたことがあるけど遺物を手にしたのは、今度がはじめてです。博物館の先生が矢じりは黒曜石でできているとおっしゃりました。黒曜石といえば校外学習の時、黒髪にあったあの黒い石だなあと思いながらさわってみました。矢じりのとがっているほうがすこしすきとおって見えました。よく先をみがいてとがらして、え物がとれるようにしていたんだなあと思いました。それから水がめやたかつきやお祭にかわかれた道具なども見ました。水がめはひびがたくさんははいていたのでこわれそうな気がしたけどもってみると重くてしょうぶそうでした。

人間の形をしたはにわがなかったのもそれも展示してほしいと思います。

(坂本祐子)

本物の石器や土器を手にしたことはとても感激し、嬉しかった。一つの土器をじっと手に持っているとその当時の人々の様子がおぼろげながら頭に浮かんでくる。石器のするどきやざらざらした土器の表面のあの感触は今だに手に残っている。

博物館へ来てこれまで学習したことが、はっきり理解できるようになった。この体験は今後の学習にも生かしていきたい。

(内田聡子)

(文責 主事 森永 茂)



博物館学習風景（展示場）

10月7日	高木背水展 (11月3日迄)		月3日迄)
	九州グラフィックデザイン展 (10月11日迄)	昭和58年1月11日	博物館歴根改修起工
10月16日	よみがえれ佐賀展 (10月24日迄)	3月1日	売茶翁展開場式 (3月27日迄)
10月29日	佐賀大学総合展 (11月3日迄)	3月1日	常設展 (3月31日迄)
11月13日	佐賀県美術展 (11月21日迄)	3月9日	佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展
11月26日	佐賀県高等学校芸術祭美術・書道部門展 (12		(3月13日迄)

—当館で頒布している図録紹介—

「岡田三郎助」図録 (頒価1,700円 送料300円)

昭和54年7月に行われた「岡田三郎助展」に伴い刊行されたもので、カラー32頁に作品32点、白黒44頁に作品102点を紹介し、併せて明治、大正、昭和を通してわが国洋画界の発展に尽くした岡田三郎助 (1869～1939) の年譜、出品目録を掲載。全113頁。

「鏡・玉・剣」図録 (頒価¥1,500 送料¥300)

昭和54年10月に行われた「古代九州の遺宝展」に伴い刊行されたもので、九州各地より出土した弥生時代から古墳時代にかけての遺品「鏡」「玉」「剣」を主にとりあげ、カラー5頁を含め237頁。

「玄界のくじら捕り」図録 (頒価¥1,400 送料¥250)

昭和55年3月に行われた「玄界のくじら捕り展」に伴い刊行されたもので、西海捕鯨の歴史と民俗についての論考、資料、関係年表などを掲載。145頁。

「心のうた古賀忠雄」図録 (頒価¥1,300 送料¥250)

昭和56年4月に行われた「古賀忠雄彫塑展・山口猛彦洋画展」に伴い刊行されたもので、カラー8頁に作品、白黒55頁に作品66点を紹介するとともに、彫塑界に大きな足跡を留めた古賀忠雄 (1903～1979) の略年譜、作品目録などを掲載。107頁。

「山口猛彦」図録 (頒価¥1,000 送料¥250)

昭和56年4月に行われた「古賀忠雄彫塑展・山口猛彦洋画展」に伴い刊行されたもので、カラー8頁に作品8点、白黒40頁に作品75点を紹介し、日展作家として活躍した洋画家山口猛彦 (1903～1979) の年譜、作品目録を掲載。65頁。

「近代の日本画」図録 (頒価¥1,600 送料¥250)

昭和56年10月に行われた「近代日本画展」に伴い刊行されたものでカラー16頁に作品14点、白黒46頁に作品76点を紹介。併せて明治以後の日本画の巨匠、横山大観、菱田春草、下村観山、前田青邨、小林古徑、安田靉彦を

はじめ、佐賀県出身の高取雅成、納富介堂、野口謙次郎らの略歴、日本画についての論考などを掲載。77頁。

「高木背水」図録 (頒価¥1,700 送料¥300)

昭和57年10月に行われた「高木背水展」に伴い刊行されたもので、カラー16頁に作品16点、白黒76頁に作品166点を紹介。併せて明治美術会、白馬会、文展、白日会等多くの展覧会に出品を重ね、豊かな画歴をもつ本県出身の油彩画家高木背水 (1877～1943) の略年譜、目録などを掲載。142頁。

「売茶翁」図録

昭和58年3月に行われた「売茶翁展」に伴い刊行されたもので、白黒78頁に作品約100点を紹介するとともに、佐賀市蓮池出身の禪僧で茶により禪の心を説き煎茶道の基礎を築いた売茶翁の年譜、作品ごとの解説を加えて紹介。129頁。

県政百年事業特別展覧会のお知らせ

佐賀県立博物館では県政百年を記念し、「佐賀県の百年—日本の近代化につくした先覚者とその風土—」の展覧会を5月7日(土)から6月12日(日)まで開催いたします。本展は近代日本の基礎を築いた先覚者の業績をたえ、その風土をみなおし本県の今後の躍進と文化立県をめざす糧にしようとするものです。

- 主催 佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館
- 会場 佐賀県立博物館
- 観覧料 大人 500円 (400円)
- 大高生 250円 (150円)
- 中・小生 150円 (100円)
- ()内は団体料金 団体は20名以上

博物館報	第60号
発行年月日	昭和58年3月31日
編集	野村綱明
発行	佐賀市内1丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社